

日本語とロシア語翻訳教授法の授業における実践について

ПРОБЛЕМЫ ПРЕПОДАВАНИЯ ПИСЬМЕННОГО ПЕРЕВОДА С ЯПОНСКОГО ЯЗЫКА НА РУССКИЙ

Svetlana LATYSHEVA

Abstract

Современную эпоху можно с полным правом назвать эпохой глобализации, которая породила для множества людей потребность овладеть средствами коммуникации с представителями других народов. Отсюда огромный спрос на специалистов, владеющих иностранными языками. Отвечая на эти потребности, учебные заведения всего мира стали уделять большое внимание преподаванию иностранных языков.

Среди практических навыков владения иностранным языком особое место занимают навыки перевода, которые, кроме всего прочего, оказываются крайне полезными в последующей практической работе выпускников. Следовательно, обучение переводу также занимает особое место в процессе обучения иностранному языку. Вопросам того, какие особенности должно иметь обучение искусству перевода вообще и письменному переводу с японского языка на русский в частности, посвящена настоящая статья.

В настоящей статье перевод рассматривается с точки зрения коммуникативной теории, то есть автор исходит из того, что задачей перевода является обеспечение возможностей коммуникации людям, не владеющим языками друг друга. Другими словами, перевод является видом межъязыкового посредничества. В то же время от других видов межъязыкового посредничества перевод отличается своей тесной связью с оригинальным текстом, то есть перевод – это, по В.Н.Комиссарову, вид языкового посредничества, всецело ориентированный на оригинал. То есть задачей перевода является создание на переводящем языке текста,

коммуникативно равноценного тексту оригинала.

По характеру восприятия текста оригинала и текста перевода, перевод можно разделить на устный и письменный, а по жанрово-стилистическим признакам – на художественный и информационный. Предметом данной статьи является письменный перевод.

Для успешного преподавания перевода необходимы критерии оценки его качества. До сих пор в теории перевода не существует устоявшегося мнения об этих критериях. Причиной этого является объективная невозможность при переводе создать текст, полностью тождественный тексту оригинала. Речь всегда идет о той или иной степени близости перевода оригиналу. Какая же степень близости является оптимальной? В настоящей статье ответ на этот вопрос дается с позиций коммуникативной теории перевода.

Автор придерживается точки зрения, что основными критериями качественного перевода являются его адекватность и эквивалентность. Под адекватностью автор понимает функциональное соответствие текста перевода тексту оригинала, то есть способность текста перевода создать тот же коммуникативный эффект на его рецепторов, что и текст оригинала. Под эквивалентностью автор понимает соответствие текста перевода и его отдельных частей тексту оригинала и его частям с точки зрения содержания и структуры. Эквивалентность имеет несколько уровней, и все они подчинены задаче создания равноценного оригиналу коммуникативного эффекта, то есть достижению адекватности перевода.

Далее автор, с позиций вышеизложенной теории, анализирует на примерах студенческих учебных переводов типичные ошибки и способы достижения адекватности и эквивалентности перевода. В результате этого анализа формулируются требования, предъявляемые к качественному переводу, на которые необходимо ориентироваться при обучении.

В заключительной части статьи сформулированы цели обучения письменному переводу, особенности этого обучения по сравнению с обучением другим аспектам иностранного языка и даны практические рекомендации.

はじめに

21世紀の世界は、グローバルな世界になり、この十数年で、世界の形は大分変わってきた。世界の地図から消えた国々もあれば、新たに誕生した国々もあり、かつて「閉鎖」されていた国が国際社会への窓を開け、経済、金融、労働の国際化は未曾有の規模となった。それに従い、世界各国の人々との間のコンタクトとコミュニケーションは増大の一途をたどっている。

この世界のグローバル化は、様々な分野で活躍する人々が他国の人々に密接なコンタクトを取る必要性を生んだ。それに従い、外国語を使いこなすこと自体はもはや大きなアドバンテージではなく、様々な分野で成功するための絶対条件となってきた。20-30年前は、外国語を使いこなす人は珍しかったが、現在は、役所、民間企業は少なくとも英語に習熟していることが前提条件とされており、2-3ヶ国語に通じている人材を確保しようとしている。

その需要に応じて、世界中の多くの大学は、外国語に習熟した様々な分野の専門家を育成するようになった。それにともない外国語そのものを専門にする学生の数も増大していた。外国語教育は、総合的で、多面的なアプローチを前提とするものであり、発音、語彙、文法など言語のあらゆる諸層が考慮に入れられなければならない。それと同時に教育というプロセスにおいては、理論だけでなく、理論の応用面に注力する必要がある。つまり、学習者が自分の考え、見解を外国語で伝えられるように、また母語話者とのスムーズなコミュニケーションができるように指導することが重要である。

外国語教育の課程において、通訳、翻訳能力の育成は、実践的な面から見て、極めて重要であり、外国語教育の不可欠な一部をなす。通訳、翻訳の専門家は、国際交流の様々な分野で必要とされ、諸大学の外国語教育に関わる学部、学科の卒業生が様々な国家機関や、文化団体、さらに民間企業で自分が獲得した能力を実際に生かす機会が多い。通訳、翻訳という行為のプロセスにおいては、理論として習得されたことが、実際に応用される。従って、翻訳、通訳の教育の場でも、理論の応用が重要な問題となる。

通訳、翻訳の教授法においては、通訳、翻訳と、外国語によるコミュニケーションはどこが異なるのか、通訳、翻訳の特徴は何であるか、又、通

訳と翻訳の質の評価基準は設定するという問いに答えなければならない。勿論、その問いに答えるのは、通訳論、翻訳論であるが、通訳論、翻訳論の研究の歴史はかなり浅く、多くの問題点に関し研究者の意見は一致していない。

本論は、ロシアにおける通訳論、翻訳論の研究成果と、過去数年間の上智大学ロシア語学科における翻訳の授業の実践に基づき、また二ヶ国語間の仲介としての通訳論、翻訳論という観点から、日本語からロシア語への翻訳における学生の共通の間違いを分析しつつ、日本語からロシア語への翻訳では、どのような問題点が出てくるか、教育の過程では、その問題点の解決を、学生にどのように教えるか、また、どのような翻訳の評価基準がありうるかという点を分析することを目的とする。

翻訳とは何か

二ヶ国語でのコミュニケーションは、外国語での会話、スピーチ、文通や論文作成など様々な形で存在している。では、通訳と翻訳は、他のコミュニケーション手段とどこか違うのか、二ヶ国語コミュニケーションシステムの中で、どのような地位を占めるか。

まず、翻訳・通訳と、外国語でのその他のコミュニケーション手段との大きな違いは、翻訳・通訳が二ヶ国語間の仲介 («Межъязыковое посредничество») の立場にあることである。例えば、話者が外国語で会話をしたり、外国語で演説、講演をする場合には、二ヶ国語でなく、当該の外国語だけがコミュニケーション手段として使われる。それに対して、二ヶ国語間の仲介の場合、ひとつの言語による原典 (テキストあるいは発言) があり、別の言語による受け手 (その言語でテキストを読みたい、または発言を聞きたい相手) があり、それらをつなぐ機能を果たす。

この二ヶ国語間の仲介に、様々な形が存在する。例えば、外国の客が、ガイドに、どの劇場でどの芝居をやっているかを調べてもらおうとするとき、ガイドと劇場の案内係りとのコミュニケーションは、外国語を話す客と母国語を話す案内係りとの間の仲介という点では、二ヶ国語間の仲介といえるが、通訳とはいえない。同じく、本や論文の要約を外国語で書くことは、二ヶ国語間の仲介 (本、論文の著者と要約を読む読者との仲介) に

はなるが、翻訳にはならない。

通訳と翻訳は、それとオリジナルのテキスト（通訳の場合には発言）との関係がその他の二ヶ国語コミュニケーションシステムよりはるかに密接である特徴を持つ。言い換えれば、通訳と翻訳は、オリジナルテキスト（発言）に従わなければならない¹。つまり、翻訳、通訳の課題は、オリジナルテキストの完全な代替物として受け手に受けさせることにあります。例えば、文学にしても、論文にしても、翻訳の場合、その読み手が、それをオリジナルテキストとして受ける。翻訳文は、オリジナルテキストの著者の名前で出版され、また引用される場合も、オリジナルテキストの著者の名前で行われる。すなわち、翻訳文は、外国語で書かれたオリジナルとみなされるのである。V.N. コミサーロフによると、翻訳と通訳は、二ヶ国語間の仲介であり、その際、翻訳、通訳の受け手は、それを、オリジナルテキストの、コミュニケーションの効果、内容、構造の面で完全な代替物として受け止める。²

つまり、この通訳と翻訳の定義は、受け手の立場からの定義である。翻訳文の読み手が、それが、オリジナルテキストと同様のコミュニケーション効果を持ち、オリジナルの内容を伝え、オリジナルの細かいニュアンスも伝えると認めれば、その翻訳文は翻訳として認められる。翻訳文は、その読み手に、オリジナルテキストを読んでいるように感じさせなければならない。L. K. ラティシェフが指摘するように、翻訳と通訳の課題は、二ヶ国語でのコミュニケーションを、できるだけ、自然な母国語でのコミュニケーションに近づけることにある³。

上記に述べたのは、通訳と翻訳の共通の役割と課題であった。しかし、通訳と翻訳は、オリジナルテキストの受容のあり方と翻訳語でのテキスト創造のあり方で大きく違う。その違いは、日本語のみならず、英語やフランス語などで、「翻訳」と「通訳」、「translation」と「interpretation」、「traduction」と「interpretation」という別の言葉が存在しているほど大きい。また、ロシア語では、両方とも «перевод» というが、区別をつけるた

1 V.N.Комиссаров Теория перевода (Лингвистические аспекты) М., Высшая школа, 1990, стр.42.

2 V.N.Комиссаров Там же, стр. 45

3 Л.К.Лагзшев Перевод: проблемы теории, практики и методики преподавания М., Просвещение, 1988, стр. 9

めに «письменный» (書式の) と «устный» (口頭の) という形容詞が使われる。その違いは、翻訳と通訳の特徴を定めている。翻訳と通訳の共通点と相違点に関しては詳しい分析があるが⁴、ここでは、簡単に翻訳の特徴を述べよう。第一に、翻訳の場合は、時間的な制限はない。従って、翻訳者は、言葉使いなどに時間をかけることができる。通訳の場合には、話しをする人の発言のテンポにあわせて訳さなければならない。第二に、翻訳の場合、すでにでき上がった翻訳文を編集したり、見直したりすることができる。通訳の場合は、一回きりの仕事である。第三に、翻訳の場合は、翻訳者は、完全なオリジナルテキストを持って、それを分析することができる。通訳の場合、前もって発言者のテキストを入手できない場合が多い。第四に、翻訳の場合は、オリジナルテキストの作者と翻訳文の受け手との間にコミュニケーションがないので、反応、コメントなどのフィードバックがない。通訳のときは、発言者に確認や質問などが可能である。第五に、翻訳は、通常「一方通行」であり、つまりオリジナルの言語から翻訳の言語へという方向が決まっている。通訳の場合は、オリジナルの言語と翻訳の言語が入れ替わる場合が多い。

この翻訳の特徴の分析は、翻訳の授業の方法を決める際に役立ち、また学生の成績の差の理由を説明しうる。つまり、授業の経験が示しているのは、会話で成績のあまりよくない学生が、翻訳では、かなりいい成績を示すことがある一方、逆に、ロシアでの留学経験があり、会話などすばらしくできる学生が翻訳では多くの間違いをすることが少なくない。従って、正しい翻訳をできるためには、ただ「言葉が分かる」ことだけでは十分でなく、テキストを分析する、文法と言葉使いを深く研究する、また、決まり文句などを覚えることが不可欠である。一般的に会話での反応が遅くても、テキストの分析能力がある学生の方が、語彙がより豊富であり、会話ができ学生より、翻訳の成績はよい。では、テキスト分析能力をどうやって身に着けるかという点、先ず、第一に、母国語でも、外国語でも本を多く読むことが一番である。やはり、翻訳の成績がいい学生の大部分は、読書が好きであり、本を多く読むという結果が出た。読書の経験が豊富な人は、テキストのニュアンスに気をつけたり、言葉の使い方に注意したりす

4 В.В.Сдобников, О.В.Петрова Теория перевода М., Восток-Запад, 2006, стр. 100-101

るので、いわゆる「言葉のセンス」が磨かれていく。

翻訳は、オリジナルテキストのジャンルとスタイルによって、分けられ⁵、またジャンルとスタイルによって、コミュニケーション効果が異なる。従って、翻訳の方法もそれに応じて、異ならなければならない。まず、翻訳は、芸術的な翻訳 («художественный перевод») (文学、詩の翻訳) と、情報翻訳 («информационный перевод») (新聞記事、論文、契約書など) に分けられる。文学の一番重要なコミュニケーション効果は、読者に美的な感覚をもたらすことにある。それに対して、新聞記事、論文などの第一の目的は、情報を伝えることにある。(当然ながら、この分け方は、かなり便宜的であり、文学の中には、情報を伝えるテキストが含まれていたり、記事、論文などに、芸術的な要素が出ることもある)。すなわち芸術的な翻訳はオリジナルと同様な美的感覚を与える目的があるのに対して、情報翻訳の目的は、オリジナルにある情報を、なるべく正確に伝えることにある。

授業の過程では、情報翻訳に重点をおいて翻訳の練習を行わなければならないと思われる。教育の段階では、先ず、複雑でなく、短い文からなるテキストをできるだけ正確に訳すことが大事である。また、このようなテキストは、文体も一般的で、文法も言葉使いもはっきりしているために、解釈のあいまいさを避けることができる。さらには、様々なテーマとジャンルのテキストが選べるので、学生は語彙を増やすことができる。それに加えて、情報翻訳は実践的な意味を持っている。つまり、大学を卒業後、仕事の中で情報翻訳が科された場合、それに対応できるようになるということである。

翻訳の質と評価基準

教育の過程の中で、重要なのは、翻訳の評価の基準を定めることである。その基準によって、翻訳方法とルールを定めることが可能になり、授業の時に、その方法とルールを学生に教えることができる。翻訳論の研究者に

5 Н.К.Гарбовский Теория перевода М., Издательство Московского Университета, 2007.
В.В.Сдобников, О.В.Петрова Указанное сочинение.

よって、翻訳の評価の基準に関しての意見は様々である⁶。それは、本来翻訳はオリジナルテキストに合わなければならないが、現実的には、それぞれの言語の文法、構造などの違いがあるために、完全に、100%合うことが不可能だからである。従って、翻訳は、オリジナルテキストに合わせるべきというものより、常に、オリジナルテキストに近づいていくべきと言えるのではないであろう。翻訳は、オリジナルテキストにいかにかに近いかによって評価されるべきである。

翻訳を評価するため、2の主な基準を設定することができると思われる。一つ目は、翻訳の全般的評価の基準である。つまり、翻訳は、オリジナルテキストと同様なコミュニケーション効果を持たなければならない。言い換えれば、オリジナルテキストを作成した人がいったい何のためにそれを作ったのか、何を言いたかったのかを、翻訳文が伝えなければならない。オリジナルテキストと翻訳のコミュニケーション効果が合致すれば、その翻訳を「適訳」 «адекватный перевод»として認めることができる。当然、「適訳」の基準は質のいい翻訳に不可欠な条件である。その基準を満たさないと、翻訳にならないともいえる。

学生の翻訳を分析すると、翻訳が「適訳」にならない理由は、大きく分ければ二つある。一つ目は、知識が不十分で、オリジナルテキストの内容を掴むことができず、オリジナルテキストのコミュニケーション効果を伝えることもできないことである。それは、難しいテキスト、または専門的なテキストを翻訳するときによくあることである。それを避けるために、先ず、教師として、学生の外国語の知識のレベルに合ったテキストを選ばなければならない。また授業を重ねて、学生の外国語の知識のベースを強めて、その上に段階的に翻訳するテキストの複雑さを増やす。

二つ目の理由は、学生が、語の意味に集中しすぎて、文全体、あるいは、テキスト全体を分析しないことである。その場合、いわゆる「直訳」

6 Г.Егер Коммуникативная и функциональная эквивалентность. Вопросы теории перевода в зарубежной лингвистике М., 1978

В.Н.Комиссаров Лингвистика перевода М., Международные отношения, 1980

В.Н.Комиссаров Современное переводоведение М., ЭТС, 2001

Л.К.Лягшев Указанное сочинение.

Я.И.Решкер Теория перевода и переводческая практика М., Международные отношения, 1974

E.Nida Towards a Science of Translation Leiden,1964

(«пословный перевод» «word-for-word translation») になってしまい、各語の意味が合っているにもかかわらず、文あるいはテキストの意味が失われてしまったり、意味の誤解が生じたりする。ひとつの例を挙げよう。翻訳練習用教材に次の文があった「例えば食事のとき、お母さんは家族の皆に「ご飯ですよ」と言います」。(その次の文は、お母さんの言葉を聞いて、皆がテーブルに集まると続く)。多くの学生は、それを次のように翻訳した。「Например, во время еды мать говорила всем: «Еда уже готова!» (たとえば、食事中に母は皆に言った。「食事がもう用意されているよ」)。一つ一つの語を見ると、その意味は合っている。しかし、文として意味が合っているかどうか。ロシア語を読むと、皆が食事している最中お母さんが「ご飯(が出来ている)ですよ!」と言ったことになる。しかし常識的に考えれば、皆がすでに食べているのに、何でそういわなければならないのか? さらに、次の文まで読むと、さらに意味不明となる。何で皆がすでに食べているのに、またテーブルに集まるのか? テキストを分析すれば、お母さんが「ご飯ですよ」と言ったのは、皆が食事している最中ではなく、食事のときになった瞬間であることがすぐ分かるだろう。それをロシア語で伝えるためにはいろいろな方法があるが、一番簡単なのは、「во время」(最中に)という前置詞を「перед」(の直前に)に変えることである。「Например, перед едой мать говорила всем: «Еда уже готова!» (たとえば、食事の直前に母は皆に言った。「食事がもう用意されている!」)。この文もスタイルの点で、改善できるところがあるけれども、少なくともオリジナルを書いた人が何を言いたかったかははっきりと理解できるので、「適訳」と認められる。それに対して、上の文は、逆に読者を迷わせるだけで、コミュニケーション効果が失われてしまっている。従って、それは、「適訳」ではない。上記のような間違いを避けるために、学生に、テキスト全体、少なくとも、文全体を見て、文法、文脈などを考慮に入れて、翻訳文の言葉使いを決めることを身につけさせることが必要である。

学生の翻訳を分析すると、その大部分は「適訳」になっている。ただし、「適訳」は、質のいい翻訳の必要条件でありながら、十分条件ではない。つまり、オリジナルテキストを作成した人は、何を言いたいのかをもろろん伝えなければいけないが、どういった表現で言いたいことを言っているのか、どういう言葉使いをしているのかというのかなり重要な部分であ

り、またそれは、テキストのコミュニケーション効果に影響を与える。従って、質のいい翻訳は、そのコミュニケーション効果だけでなく、テキストの内容、構造の面でもオリジナルに従わなければならない。訳文は、オリジナルに内容的に、構造的に合致するとき、等価性 («эквивалентность») があるといえる。ただし、前に述べたように、訳文がオリジナルに完全に100%合致することはありえないので、等価性のある翻訳は、言語的に考えれば、オリジナルに可能な限り近い物であると言える⁷。その近さと言うのは、テキスト全体にも、その各部分にも現れるうため、翻訳の等価性は、いろいろなレベルをもっている。等価性のレベルについて、多くの言語学者が研究しているが⁸、その中で、V.N. コミサーロフが提唱した次のレベルの分け方⁹が最も妥当と考えられる。

- レベル 1 — コミュニケーションの目的 (何のために述べるか)
- レベル 2 — 状況の記述 (何について述べるか)
- レベル 3 — 記述の手段 (どうやって述べるか)
- レベル 4 — 発話の構造 (どのような文法が使われるか)
- レベル 5 — 語彙の意味の一致 (どういう語や記号が使われるか)

各等価レベルで翻訳者は可能な翻訳の選択肢を想定することができる。また、上位のレベルでは、選択肢の範囲が広く、レベルが下へ下がれば下がるほどその選択肢の範囲が狭くなる。ただし、各レベルの翻訳の選択肢は、上のレベルの課題に左右される。最終的には、すべての選択肢がコミュニケーションの目的を正確に表す課題に従わなければならない。レベル1の基準は、翻訳が適訳であるかどうかを決める基準と同じであると考えられる。従って、オリジナルテキスト (あるいはその部分) と訳文 (あるいはその部分) の間の等価性のレベルはコミュニケーションの目的によって決められると言える。例を挙げて詳しく説明しよう。

前述の翻訳教材で、主人公が、犬を呼ぶ場面で「おいで!」と言う。学生の翻訳は、次のようであった。「Приходи!» (何回もやっておいで!),

7 В.Н.Комиссаров Лингвистика перевода М., Международные отношения, 1980, стр. 152-153.

8 Г.Егер Указанное сочинение

А.Д.Швейцер Теория перевода: статус, проблемы, аспекты М, 1988

Е.Nida op.cit.

9 В.Н. Комиссаров Современное переводоведение М., 2001.

«Приди!» (やっておいで!), «Иди сюда!» (こっちへおいで!)。単語だけを見ると、すべての翻訳の選択が正しいかに見えるが、全体の文脈を分析すると、そうではない。どうして間違っただけの選択をしたのか分析しよう。そのために、まず、等価性のレベルの「チェーン」は、この場合、どうなるか見てみよう。

- レベル 1 — 主人公が子供のときから犬が嫌いで、日本へ来てから、どのように犬を好きになったかと言う話 (それは、テキスト全体を読めば分かる)
- レベル 2 — 主人公が住んでいる家にいる犬を呼んでいる。
- レベル 3 — ひとつの単語の短い呼び方をする
- レベル 4 — 動詞の命令形を使う
- レベル 5 — 愛情のニュアンスがある動詞を使う («来い!」ではなくて、「おいで!」)

学生は、ロシア語の単語を選んだとき、下のレベルから上へ行ったと思われる。つまり、「おいで」と言う言葉の意味を調べて、適切であると思ったロシア語の動詞を命令形にして、翻訳に入れた。しかし、レベル 4 発話の構造 (文法) の段階でも、上の 3 つの解答のうち一つは間違っている。つまり、それはアスペクトに関わる問題であり、この場合は、一回だけの瞬間的な行動が命令されているので、完了体動詞を使わなければならないのに、反復を表す不完了体動詞が使われているということである。従って、「Приходи!» (何回もやっておいで!) という言葉は、この場合使えないことが分かる。(ロシア語の完了体動詞と不完了体動詞の使い分けというアスペクトの問題が大きな問題であり、翻訳の授業だけでなく、ロシアの文法、会話の授業においても、練習を積み重ねて、正しい使い方を身につけさせることが必要である)。

ほかの 2 つの選択は、レベル 3 では、適切であり、但し、レベル 2 まで来ると、そのうちの一つ «Приди!» (やっておいで) という選択は、使えないことが分かる。と言うのは、「Приди!» (やっておいで) という表現は、自分の家に訪ねておいでという人間に対する表現であり、人間に対してだけに使うからである。ロシア語では、人間と動物は両方とも、活動体名詞でありながら、人間と動物とは動詞の使い方が分かれている場合がある。従って、人間について使える動詞は、動物については使えない。「Приди!»

(やっおいで)はその一例である。従って、レベル2では、1つの選択だけが残ることになる。「Иди сюда!»(こっちにおいで)という表現である。この表現は、確かに使えるが、一番よい選択ではない。つまり、それもむしろ人間について使う表現なのである。

結論としては、下のレベルからレベルを上がると、選択が多く、4つ目の段階のレベル2で、ようやく使える言葉を見つけた。

今度は、上のレベル1から下がって行くとどうなるだろう。レベル1でわかるのは、人間と犬との関係の話であること。レベル2に下がると、人間が犬を呼んでいることが分かる。レベル3に下がると、短い呼び方を使う必要があることが分かる。その段階では、ある程度のロシア語の知識があれば、選択の範囲は1つの表現まで絞られたことが分かる。つまり、人間が犬を呼ぶときの決まり文句「Ко мне!»があるのだ。それが、この場合に一番適切な訳し方であると思われる。従って、上のコミュニケーションの目的レベルから、下へ行きながら、翻訳の選択を絞るときは、もっと早く、もっと確実な翻訳の言葉使いを見つけることができるだろう。その場合は、下の二つのレベルが、今回の翻訳の課題から見て、無視できるレベルである。つまり、レベル3まで下がった段階ですでに翻訳の課題が果たされたからである。

この例を詳しく分析して分かったのは、(1) 翻訳の言葉使いなどの選択は、コミュニケーションの目的に従わなければいけない、(2) ほかのレベルの等価性は、そのコミュニケーションの目的を果たすために存在している、(3) 上位のレベルで、適切な翻訳方法の選択が出来たら、それより下位のレベルへ行く必要はない。

それでも、翻訳方法の選択の過程では、レベル5まで行く場合も少なくない。また各レベルでは、等価の翻訳方法を選ぶ時、それが翻訳語の文法などのルールに従うことが重要である。それについて、テキストを例にして詳しく述べよう。

「私は半年前に中国の杭州から来た留学生です」。ここで注意が必要なのは、レベル5の地名と「留学生」と言う言葉の翻訳の等価性である。まず地名だが、学生の翻訳に次のバリエーションがあった：«Провинция Гуанчжоу» (広州省), «Провинция Ханчжоу» (杭州省), «Хантёу» («Ханчжоу»のスペルミス)。やはり、翻訳の場合は、時間があるので、辞典、地図、インターネットを調べて、

正確な翻訳を出さなければならない。杭州は、浙江省の省都であり、日本語では同じ発音の広州は広東省の省都であり、この2つは別々の都市である。抗州は、「Гуанчжоу」でなく、「Ханчжоу」と書く。また、「州」という字が入っていないが、それは都市の名前なのである。この地名は、ロシアで大きく知られていないので、説明を入れたほうがいいのである。「город Ханчжоу」（抗州市）、「город Ханчжоу, столица провинции Чжэньзян」（浙江省の省都抗州市）と書けば間違いないであろう。

また「留学生」という言葉を「стажерка」（女子留学生）、「студентка」（女子学生）という風に訳した人が多かった。ここで、学生たちは、下のレベル（レベル5とレベル4）の等価性を狙っている。つまり、「留学生」は名詞であるので、必ず名詞で訳さなければならないことに拘っているのだ。しかし、ロシア語では、留学生のことを、男性の場合は「стажер」というが、その女性名詞「стажерка」は、不自然である。また、「студентка」（女子学生）という訳は、日本語の「留学生」の意味（外国へ学びに来た学生）を十分に伝えない。問題の解決方法は、やはり、日本語の発話の構造から離れて、もっと上のレベルの等価性、つまり、ここでは目的をあらわす状況語「на стажировку」（留学に）で表現することである。「Полгода назад я приехала на стажировку из китайского города Ханчжоу」（半年前に私は中国の杭州という都市から留学にやってきました）という訳が一番適切であると思われる。

次の一例。「私は今、保証人の鈴木さんの家に住んでいます。その家には茶々と言う名の犬がいて、家族の一員です」。ある学生の翻訳は次の通りである。「Я живу у Судзуки-сан, моего поручителя. У него собака под названием Чача. Она член семьи.」（私は、保証人の鈴木さんのところに住んでいます。彼には茶々という名称の犬がいます。それは家族の一員です）

また、言葉一つ一つが見ると、訳の意味は合っている。それに発話の構造も合っている。しかし、小さなミス（「今」が抜けていることと、「鈴木さん」が直訳され、「господин Судзуки」（鈴木氏）の方がいいと思われること、また「поручитель」（保証人）という言葉は、公式的すぎて、ローンの保証人とかの場合はそれでもいいが、この場合は「гарант」（英語の「guarantor」）という言葉を使った方がいい）を無視しても、2つの大きな問題がある。

まず、ロシア語の一番目の文を読むと、その留学生は、保証人の鈴木さ

んと一緒に住んでいるような感じがする。それはやはり誤解を招く言い方である。ただし、次の文を見ると、留学生は、鈴木さんの家族と一緒に住んでいることがはっきり分かる。従って、ロシア語の訳が誤解を招かないように、最初の文にその事情をはっきりさせる一言を、日本語のオリジナルにそれがなくても、入れるべきであると思われる。従って、「Сейчас я живу в семье моего гаранта господина Судзуки»（今私は、私の保証人である鈴木氏の家族の中ですんでいます。）という文にすると、もっとも適切な訳になる。

二番目の問題は、犬に関することである。先ず「茶々という名の犬」の部分、上記に上げた翻訳の例以外に、多くの学生は、「сеё (собаку) зовут Чача»（犬は茶々と呼ばれている）や «собака, которую зовут Чача»（茶々と呼ばれている犬）という風に翻訳する。しかし、前に述べたように、ロシア語では、動物は活動体名詞でありながら、人間との区別がはっきりしている。従って上の例の «под названием Чача»（茶々という名称の）という言い方が使えないのは、それが不活動体名詞に使われる言い方からであり、「зовут»（呼ばれている）という動詞表現は、人間に関して使われる表現であるので、それも使えない。だが、ロシア語では、動物の名前を意味する言葉がある。それは、「кличка»（呼び名）であり、この場合に一番適切である。前に述べた呼び方の例と同じように、翻訳の選択を言葉の意味のレベルから上に行くと、難しく、間違いを招くが、上から下がると、犬についての話 — 犬の名前が出てくる — 犬の名前を意味する言葉を使う、というチェーンで行くと、早くて、正確な選択が可能である。最後の文も、ロシア語では、動物と人間の区別がはっきりしてある論理から考えれば、日本語の「家族の一員」を直訳するのが不自然であり、日本語にはないが、「家族の一員のような」 という言い方がもっとふさわしいと思われる。ある学生の «(собака), которая считается членом семьи»（家族の一員とみなされている犬）という言葉使いは、とても上手である。以上から、適切な翻訳文は、次の通りである。「Сейчас я живу в семье моего гаранта господина Судзуки. У них есть собака по кличке Чача, которая считается членом семьи.»（今私は、私の保証人である鈴木氏の家族の中ですんでいます。彼らには、家族の一員とみなされる、茶々という呼び名の犬がいます。）

次の一例。「犬好きになった私」。これは、教材の題名であり、テキス

トのコミュニケーションの目的と内容を表す。従って、それを翻訳する際、高いレベル（レベル1）の等価性を狙わなければならない。そのために、題名の翻訳方法としては、テキストを全部翻訳してから題名を翻訳することが一番望ましい。ただし、経験から言えるのは、学生が題名も普通の文として翻訳しようとするということである。その一例は「Я, которая стала любительницей собак」（犬の愛好家になったところの私）と「Я стала любить собак」（私は犬を好きになった）である。一つ目は、先ず、ロシア語の面から見れば、文法的にも、スタイル的にもおかしい。一方、二つ目の翻訳は、ロシア語の文法などの問題は全然ないが、日本語の文の直訳であり、テキストの内容を伝えていない。従って、題名としてのコミュニケーションの目的を果たさず、質のいい翻訳とは認められない。つまり、その翻訳文は結果だけを語っているが、テキスト自体は、もともと犬が大嫌いな人は犬が好きになったきっかけと過程について語っているのである。そのニュアンスが、翻訳文に表現されていない。問題の解決は、「Как」（どのように）という言葉为题名に入れることにある。それによって、「Как я стала любить собак」（私はどのようにして犬が好きになったか）、あるいは、文章をもっと短く、読みやすくしたければ「Как я полюбила собак」（私はどのようにして犬を愛するようになったのか）という題名をつければ、テキストは犬が好きになった理由の過程について語っていることが十分に伝わる。

結論として、質のいい翻訳とは、先ずオリジナルテキストのコミュニケーションの目的を反映し、オリジナルテキストと同じコミュニケーション効果をもった適訳のことである。それに加えて、訳文とオリジナルテキストの様々な部分のレベルの等価性関係を作らなければならない。特に、情報翻訳、すなわち、それを受け手にできるだけ正確に情報を伝えることを目的にしている翻訳では、等価性の基準はますます厳しくなっている。逆に、芸術的な翻訳は、オリジナルの美的な感じを伝えるのが一番の課題であるので、特に詩の翻訳の場合、等価性を犠牲にすることが多い。

適訳と等価性の基準に合うように、翻訳するとき、いくつかのルールを守らなければならない。先ず、第一に、翻訳文は、翻訳語の文法などのルールに合わせなければならない。翻訳文を読む人は、それを自分の言葉で読むので、自分の言葉の基準でそれを評価する。やはり、コミュニケーションの目的が達成されるためには、翻訳文の受け手によってそれが、自分の

言葉から見て、正しく書かれたテキストとして受け止められなければならない。

また、翻訳文は、ジャンルの的にオリジナルに合わなければならない。そのときは、テキストのジャンルそのものは、オリジナルテキストによって左右されるが、ジャンルの中のスタイル、談話構成、言葉使いなどは、翻訳語のルールに従う。(ただし、外国語の影響が時に現れてくるのは当然であり、例えば、外来語が、最初に借用語となるのは、翻訳文経由であると思われる。)

翻訳をする人は、外国の生活習慣、文化などのできるだけ幅の広い知識を持たなければならない。それがなければ、スタイルの特徴、言葉使いのニュアンスをつかむことは不可能である。

文学を翻訳するとき、翻訳言語の国の、芸術的な見方、流行しているセンスなどが、影響する。17世紀のフランスや18世紀のロシアでは、翻訳文は、移入される国の流行に応じて変化することがあった。例えば、ロシアでは、ドイツなどの詩、小説が翻訳されたとき、詩はロシアの歌のスタイルに合わせられ、小説がロシアの民話のスタイルに合わせられた。

ただし、現在では、翻訳の目的は、外国のテキストを、自分の国の文化の習慣に従って、変化させることでなく、外国の文化、外国の人の見方などを紹介することにあるので、やはり、適訳と等価性の基準を守らなければならない。

まとめ (学生の共通の間違いと教育の課題)

翻訳する能力を、学生に身につけさせるには、いくつかの条件があると思われる。

1. 環境作り

ロシア語への翻訳を教える前に、学生がある程度ロシア語能力を持たなければならない。翻訳文は、ロシア語のルールに合わなければならないので、翻訳そのものの授業の前段階として、ロシア語の文法、言葉使いの基礎を作らなければならない。従って、翻訳の授業は、3年生4年生向けに行うと、最も効果が期待できる。

同じく、質のいい翻訳には、ロシアの生活習慣、文化などの予備知識が不可欠である。本、映画などを通じて得られるロシア語の言葉使い、決まり文句、ことわざなどに関する知識が翻訳作業に役に立つに違いない。

2. 翻訳の特徴を覚えさせること

ロシア語の文法、会話の授業では、分析の対象になるのは、文もしくは、決まり文句である。文法の授業で、日本語の文をロシア語に訳すのは、文法のルールか決まり文句を覚えるためである。従って、この授業では分析の単位は、言葉、決まり文句、もしくは文である。

翻訳の授業で、分析単位になるのは、テキスト全体である。文でなく、テキスト全体を分析したら、質のいい翻訳が出来る。翻訳は、ワークの対象がテキスト全体である。

3. テキストの分析

テキストの分析の手順を覚えさせることが翻訳の授業の大きな課題である。まず、第一に、テキストのコミュニケーションの目的（作者は、何を言いたいのか）を掴まなければならない。テキスト全体を読まずに、翻訳に手を付ける事は間違いの元になるので、それをやらせない。二番目のステップは、テキストのジャンルとスタイルを定める。ロシア語のそのジャンルの特徴を思い出させる。スタイルを守らないのは、翻訳のときの大きなミスである。三番目は、テキストのなかで分からなかった、または疑問に思ったところに戻って再び分析をする。ひとつの分からないところの翻訳がおかしくなったら、全体の翻訳がおかしくなることがあるからである。四番目に、決まり文句、ことわざなどがあるかどうか確認すること。それが終わってから、翻訳そのものに手を付けることができる。翻訳は、普通文ごとに行われるが、文を翻訳するとき、言葉一つ一つの意味に集中しすぎてはいけない。文全体を考えて、さらに、テキスト全体の文脈を考慮に入れて翻訳を行うべきである。

4. 練習用教材の選択

練習用の教材の選択は、教師の重要な課題である。まず、それはできるだけ情報を伝える教材であり、最初の段階では、文が短く、分かりやすい

教材が望ましい。また、そのサイズは、授業の時間を考えて、学生が翻訳をする前に、テキストを全部読んで分析することができるような、長くない教材がいいと思われる。経験を重ねれば重ねるほど、文学的な教材も導入することができる。また、なるべくジャンルとスタイルの違った教材を出すのが望ましい。

上記のように、質のいい翻訳をする能力を学生に身につけさせるために、ロシア語やロシアの文化などの総合的な知識を基盤にして、翻訳の授業では、テキストを分析する能力、また分析の結果に基づいて、翻訳文の言葉使いなどを選択する能力を育成しなければならない。

参考文献

- Н.К.Гарбовский Теория перевода. М., Издательство Московского Университета, 2007
- Г.Егер Коммуникативная и функциональная эквивалентность. Вопросы теории перевода в зарубежной лингвистике. М., 1978.
- В.Н.Комиссаров Теория перевода (Лингвистические аспекты) М., Высшая школа, 1990.
- В.Н.Комиссаров Лингвистика перевода. М., Международные отношения, 1980.
- В.Н.Комиссаров Современное переводоведение. М., ЭТС, 2001.
- Л.К.Латышев Перевод: проблемы теории, практики и методики преподавания. М., Просвещение, 1988
- Я.И.Рецкер Теория перевода и переводческая практика. М., Международные отношения, 1974
- В.В. Сдобников, О.В. Петрова Теория перевода. М., Восток-Запад, 2006.
- А.Д. Швейцер Теория перевод: статус, проблемы, аспекты. М., Наука, 1988
- E.Nida Towards a Science of Translating. Leiden, 1964